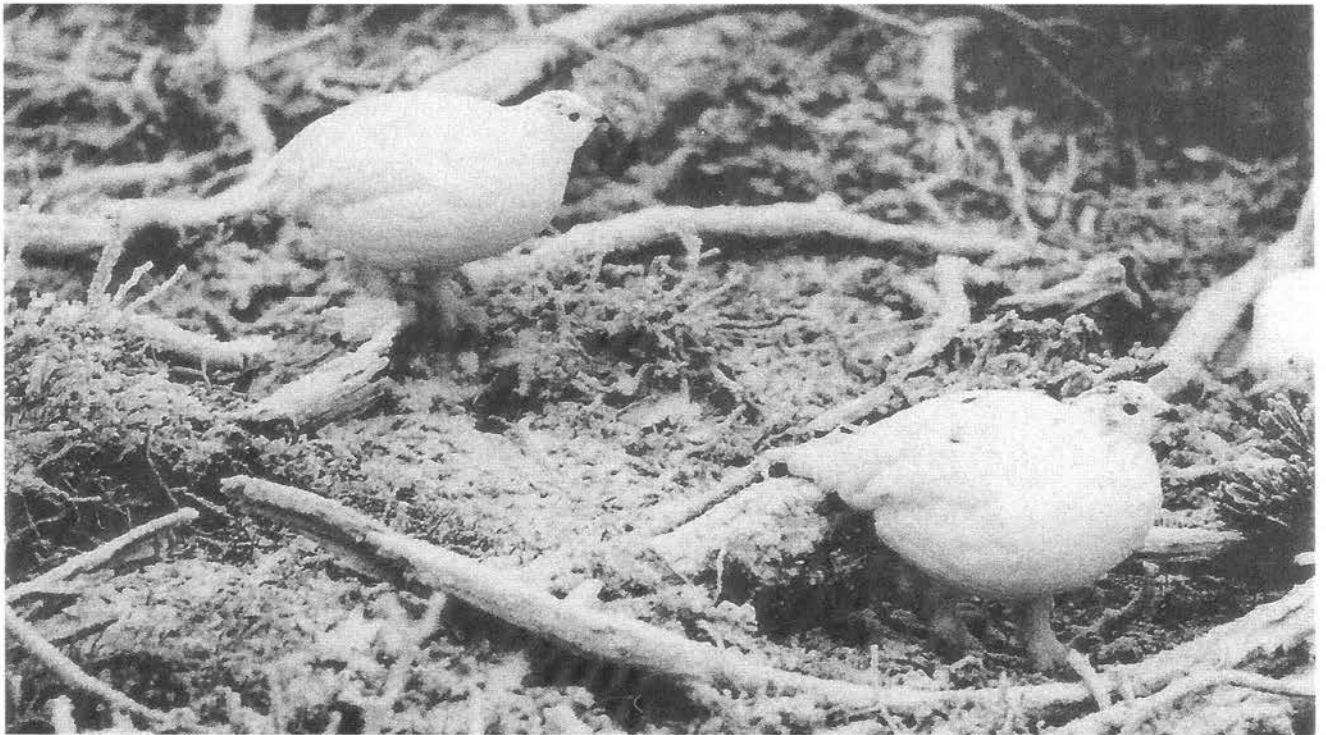


山と博物館

第55巻 第12号 2010年12月25日

市立大町山岳博物館



撮影…丸山隆士

金峰山のライチョウ

宮野 典夫

金峰山は標高2599メートルで、長野県と山梨県の県境に位置し、少ないながら高山植物もある山域の中にあります。

昭和42年7月27日、山梨県林務課の職員らが、南アルプスからライチョウのオス2羽とメス3羽の計5羽を金峰山に移殖しました。

この移殖の7年前の昭和35年の8月21日には日本鳥学会や林野庁が主体となって北アルプスのライチョウ7羽を富士山に移殖しました。その後の調査で繁殖の確認がされているものの、世代交代を繰り返すことができず、ライチョウは富士山から姿を見ることができなくなりました。

金峰山への移殖は、環境からみて稜線にはハイマツもあり、富士山より有利だと考えられました。

その後の発見情報を確認すると、昭和49年2月までは時々ではありましたが、生存を示す痕跡があったようです。

このたび、金峰山のライチョウに関して大町市常盤の丸山隆士氏より情報提供がありました。アルバムなどの整理中にライチョウの写真があったとのこと。記録によりますと昭和46年11月22日午前8時30分過ぎ、金峰山の山頂近く、朝日岳寄りでの撮影となっています。放鳥した地点が山頂のおよそ500メートル西下方との記録がありますので、おそらくこの個体群は金峰山周辺を生活の場にしていただいでしょう。

写真には冬の姿の2羽のライチョウが映っていて、目からクチバシにかけて白色ですので2羽ともメスの個体です。ただし、写真からは4年前に移殖した個体なのか、金峰山で繁殖した個体なのかを推測することができません。

昨年、白山でメスのライチョウが確認されたのも、ライチョウの写真撮った方が白山自然保護センターに情報を寄せられたことが発端でした。一枚の写真が科学的な調査のきっかけになったわけです。

金峰山にて撮影されたこの2羽のメスのライチョウの写真も、ほかの情報とつなぐことができれば、点から線へと展開でき、今はもう見ることができなくなった金峰山のライチョウの動向の解明につながるかもしれません。

(大町山岳博物館館長)

トイレ考

長澤 武

1. 排せつ行為の呼び方

排せつ行為はいろいろな呼称で呼ばれている。一般的に家庭ではトイレに行く、便所に行く、用足しに行く、うんちをするなどで、一歩社会に出るとこの他、お手洗いに行くや文章では用便、排便などの語がこれに加わる。また病院用語では「お通じ」と呼んでいる。

この他、女の子は喫茶店などでは「お電話かけに」などと、それとなく美しい言葉で席を外す。しかし屋外で仕事をする土建業の作業員などは、急に便意を催して木陰などでする排便は「野糞」「糞ひり」などと呼んでいるし、登山者仲間では、山中でする排便を「キジ撃ち」とか、女の子は「お花摘み」などと呼んでいる。

2. トイレ施設の呼び名

トイレ施設もいろいろな呼び名で呼ばれている。①厠、厠屋 ②川屋 ③雪隠、ちようず場、はばかり、じようと ④東司、やすみ所 ⑤便所、トイレ、WC、化粧室、お手洗いなど。

①は母屋のそばに建てた側屋の意で、昔はトイレはこのように母屋と少し離して独立して建てるものが多かった。

②の川屋は文字通りで、近くに川や流れがある所では、トイレはその流れの上や、また

は川が大きい場合は、そこから分流させた小流の上に板を渡して、そこで排せつ行為をし、排せつされたものは自然に下流に流れ去るようにしたもので、水洗トイレの原形とも言うべきものである。

③は用便をする場所または手や顔を洗う場所を言う言葉。④も仏教用語で、用便をする所を言う言葉。

⑤はそのものずばり、用便をする所を言う言葉で、これは昨今トイレの有ヶ所を示す表示に、カラーの人形絵などと共に多く使われている。

3. トイレ余話

(1)お返し、駄賃

汲み取り式の便槽では、小便の方が多く溜るので、便槽には水液が多く、大便をすると、そこへ落ちた時、水液がその反動で上へ飛び返ってくる現象が起き、強い時には尻にまで当たって気が悪い。

この現象を俗にお返しとかおはね、駄賃といつていやがり、それを避ける為に途中の斜目に板を付いたり、野山から草を刈ってきたり、養蚕が盛んだった頃は「蚕尻」という蚕の糞や蚕が食べ残した桑の葉を便槽に撒き散らしたりして、そのはね返りを防いだ。

(2)こも吊るし

今でも山村では、寒い冬などに、部屋に出

入りする時に戸をしつかり閉めない人のことを「こも吊るし」と呼ぶのを時々耳にする。

が、これは昔の便所の構造から出た言葉で、昔の便所の入口は戸ではなく、「こも」を吊り下げただけの構造であったので、ここへ入りする時は、その「こも」の一端をつかんで横へ動かして出入りするだけの簡単なもので、しつかり閉めたりする必要はなく、自動的にこもは元に戻ってくれる仕組みになっていた。この方が屋内に臭気がこもらず良かったのである。

丁度今の自動ドアのようなもので、入りたり出たりする時、一々手でしつかり閉める必要がないものであったので、戸をしつかり閉めない人のことを、そのように呼ぶようになったものである。

4. 厠神

神道や仏教では便所（東司）も大事な修行の場とし、ここにはそれぞれ神を祀り、毎朝お参りをし供物を供えることを忘れないで行っている。

民間でも日本では、糞尿は大事な肥料として高価で取り引きがされてきており、それに伴い便所は大切に尊い所という観念が生まれ、神を祀り清潔にし花を飾るなどしてきている。

厠神は卜部の神道では埴山姫神と水岡女神、仏教では烏芻（樞）沙摩明王を祀っている。

修行僧の雲水のいる大寺では、雲水は朝四時に起きて飯を炊き、本尊をはじめ多くの仏に仏飯を供える。が、その一つに厠神がある。この神は東司の中央が入口に祀られていて、臭気が残る所に仏飯は供えられる。

仏飯の供えが終ると掃除が始まり、やがて

朝食となるが、この時先ほど供えられた仏飯は、厠神のものも含めて下げられお粥にしていた。これは「仏と人が合体して饗飯する尊いこと」と解釈されている。

民間でも厠神は、昔は全国のほとんどの所で祀られていたようだ。手元にある資料から二、三紹介すると、

例

(1)愛知県知多半島の先端にある日間賀島の例
ここでは便所は母屋とは別に一坪の個建てで、前半分は便所、奥の半分は板じきりの板の間でかまどが据えてあって、女性たちが月間のかまどで据えてあって、女性たちが月間の時ここで別食をしたものだということ。ここに祀られている厠神は、「ウツシマサマ」と呼び、戸の所に油皿を置いてあって、正月三ヶ日、節分、ツキ日にはこれに燈明をとぼし、花や線香を上げる棚もつくってあった。

（『日間賀島民俗誌』瀬川清子 刀江書院 昭和26年）

(2)岐阜県奥飛騨地方の例

厠神はコウカの神様といって、ハバカリ場の隅の柱に祀り、何時も花を供える。十六日が神様の縁日で、この日は花や燈明を供える。

（『飛騨探訪日誌』沢田四郎作 自費出版 昭和13年）

(3)新潟県六日町の例

明治末頃の話だが、お産後へその緒が落ちたらそれを和紙に包み、ヨシを添えて大便所の上に吊るした。大便所には神様がいて、人の体から出る不浄物を全て清浄無害にして下さると信じられていて、産後七日目には米のおひねりと、自分の髪の毛を切ったものを持ち、赤児を抱いてジヨード参りをし、赤児の無事成長と産後回復を祈ったものです。



長谷寺のトイレの入口に祀る「鳥栖沙摩明王」の像

(『植物と民俗』宇都宮貞子 岩崎美術社 昭和57年)

(4) 富山県内の例

富山県内では広い地域で年取りの日の十二月三十一日の朝は、年男が体を清めて、あらかじめ採ってきて格納してある松を、家の各所に飾る。これを「松飾り」という。飾る場所は神棚、土蔵、馬屋、炊事場、かまど、便所などで、便所には特別神棚を祀っていないが、松飾りを供え飾る。

(『富山県史民俗編』富山県 昭和48年)

(5) 群馬県奥多野地方の例

奥多野中里村間物の高橋家では、便所にも御幣を付けた松飾りを供え新年を祝う。そして家族の人数だけ結び玉をこしらえて残しておき一月十四日の「どんど焼き」に持って行き、ここで焼く。

(『奥多野残照』三沢義信 上毛新聞社

昭和61年)

(6) 長野県内の例

便所に祀る廁神は「ミサキの神」を祀る〔安原〕。「鳥頭明王」を祀る〔中萱〕。「うずま明王」を祀る〔下角〕。「鳥栖沙摩明王」を祀る〔洗馬他〕。「コーカノ神」を祀る〔中条、西之久保他〕。「ジヨード神」を祀る〔吉野〕などである。

祭日の、十二月三十一日に米、酒を供えて神でお払いをする(二重)。十二月三十一日に煤払いをし、きれいに掃除をしてから「お飾り」を供え松も飾る(館之内)。神様は祀っていないが「若年」(小正月)の繭玉(団子)を柳の枝にさしたものを入口の柱に飾る(中村)。

(『長野県史民俗編』第三巻12 長野県 平成元年)

筆者宅は白馬連峰の麓にあるが、昭和三十

年代まで家の内からと外からも戸を開けて入る便所があり、廁神は祀ってなかったが、十二月三十一日には、上質のA4判大の白紙二枚を重ね、中央の端に穴を開けてここへカンジンよりの紙紐を通して赤松の枝に縛った「松飾り」を、外から入る戸口に飾っていた。が、その後家を新築して、外から入る便所が無くなってからは、「松飾り」は飾らなくなった。

5. 落とし紙いろいろ

人間が排便の後、尻を何かで拭くようになってきたのは、身に衣服をまとうようになってからで、それ以前は野生動物と同じで、拭くようなことはしなかっただろう。

ところで、この時の拭く物であるが、時代の推移と共に大きく変化していることに驚く。昨今は専用のトイレトペーパーが安値で市販されているばかりか、洋式トイレでは排便後ポタン一つで温水が出て局部をきれいに洗浄してくれ、次には温風が出て、きれいに乾燥までしてくれる、全く手出しせずきれいに後拭きができる時代となった。

しかしここまで来るには、長い年月がかかっており、太平洋戦争前までの山村では何処でもいろいろな物を使っていた歴史がある。

(1) 草の葉、木の葉

まず歴史的に見て、最も古くから何処でも生えていて広く用いられてきたものに、身近にあるフキ(落)、ギシギシ、クズ(葛)の葉、ヤブマオ(隠岐)、カラムシの葉(岐阜県国府町他)、エヒ藻などの川藻(長野市周辺他)、山村ではリョウメンシダ(ホトコ草)、コゴミ(クサソテツ)、オタカラコウなどの草の葉。

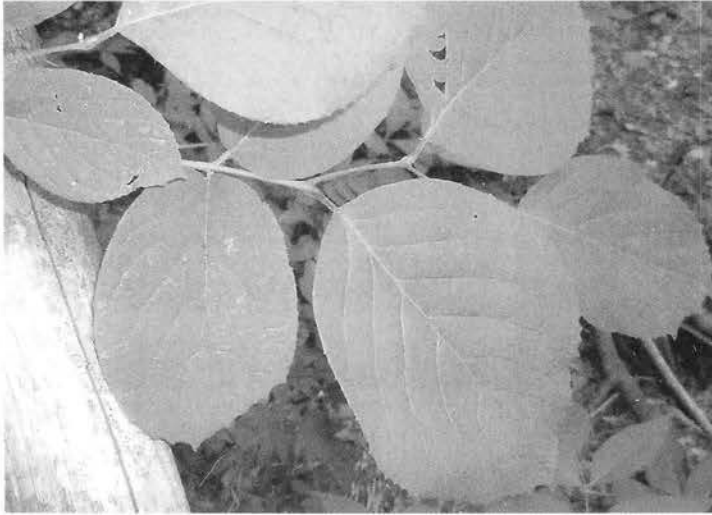


リョウメンシダ

木の葉では、タニウツギ、ゴマキ、ハクウンボク(ヒトツバ)、アジサイ類の葉、柿の葉などが挙げられる。

フキ、ギシギシ、クズの葉は大きく柔らかくしなやかで使い易く、全国的に用いており、シダの仲間リョウメンシダやクサソテツなどはもんで用いるが、柔らかくて良いもので、秋田県や長野県と新潟県の県境にある秋山郷の他、岐阜県の揖斐川流域でも、ホトコ草と呼んで広く用いていた。が、用い方になれと多少の技術が必要だったようだ。

この他岐阜県上郡ではシシウドをセンチ草(雪隠草)と呼んで用いてきた。ハクウンボクは、東北地方から広島、岡山県までの広い範囲でヒトツバと呼ばれ、葉は大きく柔らかく、微毛が密生していて、ピロードのような感触があり、落とし紙の代用として具合よく、またゴマキの葉も大きく、秋田県由利郡では



ハクウンボクの丸くて大きな葉

エンコノ尻ぬぐい、山本郡では犬の尻ぬぐいと呼んで、共に落し紙の代用としていた。

落し紙のことを岩手県や新潟県の佐渡ではカキン、また佐渡では肥柄杓をカキンシヤクシと呼んでいる。これは古い言葉の名残りのようだ。

以上述べたものは、そのまままたは乾かして用いた。中でもクズの葉が最も上等のものだとされ、夏の土用中に採ってきて適当に束ね、薄い塩水にしばらく漬けてから良く乾かし、便所に吊り下げておいてそれを一枚ずつ取って使った。福岡県彦山東麓でカンニヨ、またはカンネといふ「カンニヨは徳なもの」といり、また「コイとり実とり あとのカスは尻のこい」という諺がある。コイは粉のこと。

大正時代の終わりには、新聞紙や障子を張

り替えた古紙などが使われるようになるが、それまでこのような状況は続いた。

以上の落し紙代用として用いた草や木の葉は、使用後はそのまま便槽に捨てられた。が、これは当時糞尿は大事な肥料となるものであったから、落ちたものは腐敗し肥効も増大するので、喜ばれるものであった。

(2) ちゅう木 (籌木)、かきん (化巾)

菅江真澄は天明八年六月から七月に岩手県を旅し、岩手郡岩手町の御堂村で山伏正覚院に一夜を頼みここに宿り、その時の様子を「こころは蚊帳もなく「かやり」もたかない、信濃路の山里と同じように、柵といつて薄く削った板を細かく割り、あるいは枯れた太いタドリの幹をくだいて小さな箱に入れ、便所のすみに吊っておいて、これを用便のたびに使っている。中国人の風俗で、その名を籌木とか化巾といっているのも同様で、ここにも古い風習が残ったものである。」と書いている。(『菅江真澄遊覧記』Ⅱ「岩手の山」)

岩手県閉伊地方ではカキギ、その周辺の郡ではカキンと言ひ、これを入れて置く箱をカキギ箱と言っていた。秋田県鹿角地方では尻拭箱(シリヌゲバコ)といい、把手の付いた箱が使われていた。

「高山のチュウギは富山のつけ木」という子供歌がある。これは高山市で落し紙として使う「ちゅう木」と富山で火の焚き付けに使う「つけ木」とは同じ寸法のもので良く似ているとも、または上流の高山市で落し紙として使ったちゅう木は、洪水の時に流されて神通川の下流の富山市で拾われ、乾か

して付け木として売られている。ともとれる歌で、高山市やその周辺では松の柵目の板を幅二センチ長さ十五センチに裂き、落しチュウギ、チュウゲなどと呼び尻拭きに使い、使用後は便槽に捨てることなどしなかった。それは便槽の糞尿は、運び出して田畑の肥料にするので、中に異物が入っていると使う時に困るからで、使用後川に晒して再び使ったり、川に流すこともあったという。

(『厠考』 浅野弘光 教育出版文化協会 平成4年)

高山市辺で「ちゅう木」と呼ばれた落し紙代用の割り木片は、同じ岐阜県でも南の美濃と呼ばれる中津川辺では、洪水の時など木曾川へ上流からよく流れてきて、「あれは木曾のはね木だ」と言つて皆嫌がったものだといふ。そしてまたそれが、更に下流のほうで拾い上げられて、一把いくらで焚き付けに売られていたといわれている。

(『山村小記』 向山雅重 慶友社 昭和49年)

小野蘭山述の『本草綱目啓蒙』享和三年刊にも、「厠籌 カワヤノステギ チュウギ 土州甲州云々」と載っており、高知県や山梨県でもこのように呼んで使っていたことが分かる。

(3) 捨木、ぞう木、ようぞ木など

昭和十年代まで信州のほとんど全域で、「すてぎ」と呼ばれる長さ十五センチ、太さ人指し指くらの木片を割った物を、使用後の尻拭きに使っていて、新しいのが一方の箱に入れてあり、使用後のものが他の箱に入れてあった。またこの「捨木」のほか、「粟稗からむしの稗、麻稗などの繊維を採る為皮をむいた後の稗を捨木と同じように長さ

十二センチくらいに押し鎌で切つて使っている所もあり、また割り竹を使つていた所もある。これらを「ぞうき」「ようぞ木」「ようど木」または「ぞうきぼう」と呼んでいた。また飛驒の蒲田では「ホトケギ」と呼んでいた。これらも使用後は便槽に捨てるようなことはせず、他の箱へ入れて置き、後日土に穴を掘つて埋めるなどしていた。火に燃すことも禁じられていた。それは火は神聖なもので、きたない物など火に燃やすと罰が当たると言われていたからだ。

大正時代以前はこれらの他に、藁や縄を使つている所もあったという。藁はすぐれたワラの小束を用意しておき、これから一つまみ取つて、用を足している間に折り曲げて十二センチくらいな棒状の小束を作り、これを使つて尻を拭いた。

縄は「わたし縄」と呼ぶもので、便所の土間にまたぐ高さに、親指くらいの太さの縄が張つてあり、一端から順次使つてはたぐつて後へおかつて、下のかごへ入れる仕掛けにしていた。

(白馬村文化財審議会委員)

人事異動のお知らせ

平成二十二年十月一日付、臨時職員 北村洋子が選挙管理委員会より転入しました。

山と博物館 第55巻 第12号

発行 2010年12月25日発行
〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六-1
市立大町山岳博物館

TEL 026-211-0111
FAX 026-211-1111
E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpk/

印刷 大系タイムス株式会社
定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七-一三二九三